

# 知的障害者家族とはどのような存在か

## —構築主義アプローチによる文献研究—

慶應義塾大学 総合政策学部

4年 山口桃佳 (72008507)

### 要旨

現在の日本では成人後も知的障害者は家族と同居する傾向が強いと言われており、家族は親亡き後問題や障害者からの暴力など日々様々な問題に直面している。本稿では障害学の構築主義の研究蓄積をレビューした上で、家族に関する研究を類型化し、構築主義の視点から研究上の欠落を示した。その結果、障害学の系譜はオリバーの「障害の社会モデル」を筆頭に、障害者は社会によって構築されたという視点で研究が進んできたことがわかった。一方アメリカでは、社会からの偏見や正常性からの逸脱という文脈で障害が語られていることが確認された。次に障害者家族を扱った研究についての類型化を試みた。その結果、「どんな障害者家族が回復力（レジリエンス）を持つのか」「母親が持つ障害児への葛藤と受容」「障害者のケアをする家族」「家族のケアを社会がどのように代替していくか」「新しい家族のあり方」という5つのカテゴリーの研究に類型化できることが示唆された。特に「新しい家族のあり方」を主張するカテゴリーでは、介助される/する関係としての障害者と障害者家族から、純粋に親子として関係を再構築することを目指す研究が存在することがわかった。しかしそれは「脱家族」を主張する日本の研究でのみ用いられてきた視点であり、あくまでも提言に留まっている。今回、構築主義の観点から障害学と障害者家族の議論について整理することで、障害学においては障害が構築されてきたという研究は多くあったものの、障害者家族においては一部の文脈でしか言及されていないことが判明した。以上を踏まえ、障害者家族は家族を脱するためにどのようなネットワークを構築するのかということを明らかにする研究が、今後必要であると結論づけられた。

**キーワード：障害者、知的障害者家族、社会モデル、構築主義**

## 1. はじめに

日本では知的障害者と家族の同居率は高くなっている。『平成 28 年度生活のしづらさなどに関する調査』において 65 歳未満の療育手帳所持者の同居者の内訳をみると、92% が親、40%が兄弟と同居しているのに対して、夫婦や子と暮らしているのはそれぞれ 5% 未満であり、他の身体障害者や精神障害者と比較してもその差は顕著である（厚生労働省 2018:19）。それは障害の特性上、社会的な自立が難しく家族のサポートを必要としていることが理由として述べられている。また成人後も子どもの頃とライフスタイルが変わらない為、親や兄弟と同居し続ける傾向があるとも指摘されている（藤野, 2022）。

このように、日本では障害者とそれを支える家族という図式が一般化してきた。しかし、その裏では「親亡き後問題」（西村, 2009）、母親のケア役割（田中, 2020）、また家庭での障害者からの暴力（藤野, 2022）など様々な問題を、家族は背負ってきたといえる。

それらの問題の実態は、障害者家族しか知り得ないことである。障害者家族がどんな思いを持っていても、ニュースとしてメディアに取り上げられた際には、「可哀想な家族」「障害者は悪だ」という表象的な理解に落ち着いてしまうと考えられる。だからこそ、障害者とその家族が結んでいる関係性を、今一度整理し考える必要がある。

障害者やその家族が主体として存在するという個体論的アプローチの他に、関係論的アプローチというものが存在する。このアプローチでは、社会関係があり、社会関係の中で事後的に主体と客体が構成されていくという考え方をとることで、主体や自己の変容ではなく、関係の変容に基づく主体や自我の変容が読み取ることが可能になる（荻野, 2014）（小熊, 2012）。つまりこの考え方では、障害者という主体があるわけではなく、関係を結ぶことで障害者となるのである。また障害者の家族も、関係を結ぶことで、障害者の家族となる。

そのため本論文では、まず障害学の構築主義の研究蓄積をレビューしたうえで、家族に関する研究を類型化し、構築主義の視点から研究上の欠落を示していく。

## 2. 方法

本研究を行うにあたっては、慶應義塾大学の資料検索ツールである KOSMOS を用いた。検索語は「障害学」「disability studies」であり、そこから得られた本や学術雑誌の中から本レビューをまとめた。また、本や学術雑誌の参考文献のリストに載っている本や学術誌の中から関連のある文献を選び、実際に調べた上でレビューに加えた。また実際に慶應義塾大学メディアセンターに足を運び、書架から「障害学」「知的障害者」「知的障害者家族」といったタイトルの本を中心に選び、レビューに追加した。

そして本研究では、知的障害や自閉症の障害者を持つ家族のレビューについてまとめている。そのため、知的障害や自閉症に全く関係のない研究や議論についてははできるだけ省いた。具体的には、視覚障害や聴覚障害、学習障害者にのみに関わりのある研究である。

### 3. 障害者の議論

イギリスでは 1970 年代に「隔離に反対する身体障害者連盟」(UPIAS)によって、人々は社会によって差別されるのであって、身体障害によって差別されるのではないと宣言された。その提言はオリバーの「障害の社会モデル<sup>1</sup>」の下地になり、障害者は社会によって作られるという認識が広まった。そして障害がもたらす様々な問題を社会問題として捉え、解決していくという視点が作られてきた<sup>2</sup>。

1980 年頃には、障害(ディスアビリティ)は生産様式や経済組織の変化によって社会的に生み出されてきたとされる議論が始まった。ハンクスとハンクス(Hanks & Hanks, 1980)は、生産様式の変化は、社会の主要な価値との結びつきを通じて文化的に産出されるとした。そこでは、その社会が狩猟採集、漁業、農業、工場制手工業のいずれに依拠した経済なのか、世帯もしくは一族、集団(band)、部族、個々の賃金労働者を通じて、生産過程がどのように組織されているのかということが、その社会に住む障害者に重要な影響を与えているとした。例えば、工場労働の社会で労働から追い出される障害者だけではなく、神の加護を受ける高位の存在としての障害者を作り出しているということである。

オリバー(Oliver, 1990)は、労働力から排除されることによって障害者が作られるとした。そこでは、資本主義の台頭によって個人主義を促したことが、ディスアビリティのイデオロギーの核になっていると述べていた。

そして史的唯物論の枠組みを使って障害者の研究を行ったフィンケルシュタイン(Finkelstein, 1980)は、進化論的なモデルを発展させた。このモデルはマルクスとエンゲルスの唯物史観のように、第 3 段階を社会主義への移行とは結びつけていないことが特徴であるとされる(Oliver, 1990)。第 1 段階は、一般に封建社会として知られる産業革命以前のイギリスに相当する。第 1 段階ではみな農業活動に従事し、障害者は経済基盤から排

---

<sup>1</sup> 「障害の社会モデル」とは、身体的機能の制約である「インペアメント」と障害者の経験する社会的障壁である「ディスアビリティ」を区別するものである。そして「インペアメント」が「ディスアビリティ」に結びつくとは限らないとした。しかし、それにも関わらず「インペアメント」が「ディスアビリティ」に結びついている場合には、両者を結びつける何らかの社会的要因が存在すると考える(加藤, 2021)。

<sup>2</sup> アメリカの自立生活運動においても「自立生活パラダイム」という社会モデルに相当するパラダイムがあった。自立生活パラダイムでは、障害者が変わるというよりも、障害者が依存的にならざるをえない社会のあり方そのものを変えること、環境変化させることにより力点が置かれている(要田, 1999)。また日本の障害者解放運動でも 1970 年代に「青い芝の会」という団体が、障害問題を社会の責任として追及するなどの動きがあった(杉野, 2007)。

除されなかったとしている (Gleeson, 1999)。第 2 段階は、労働の中心が家庭から工場に移った産業資本主義への移行期に関するものである。ここでは工場ベース生産システムの「規律性」に障害者がついていくことができず、有給労働から排除され、施設へと隔離するようになったと述べられている。第 3 段階は、現在私たちが移行しつつある社会のあり方を指している。これは排除されてきた障害者を再び社会に戻す戦いであるとしている。

フィンケルシュタインはマルクスと同様に、資本主義の台頭が社会から排除される障害者をつくった<sup>3</sup>としているが、特にフィンケルシュタインの説明では産業資本主義の出現に伴う第 2 段階において、何が起こったのかを理解するのに役立つとされている。

一方 1950 年代のアメリカでは、社会がどのように障害者を排除してきたのかについて研究されてきた。パーソンズは『社会システム』(1951 年)の中で、社会的機能不全の顕在化と管理に関する分析に、病気、疾病、障害に代表される「逸脱」を取り入れた。このパーソンズの構造機能主義的アプローチが、アメリカの医療社会学の基礎になった (Thomas, 2007) と言われている。

その次におこったのは、社会的秩序や社会的行為の意味に着目したアーヴィング・ゴフマンや、現象学、エスノメソドロロジーの研究者達である。これらの社会学者はパーソンズと同様に病気は社会的逸脱の一形態であるとしているが、人を「逸脱者」とする行動や個人的属性 (病気、障害、売春、アルコール依存症など) に固有の何かがあるという考え方を否定し、特定の病気や障害の社会的意味は文化によって異なる (Thomas, 2007) とした。

これらの研究は、障害者が社会の中でいかにして逸脱とされるのか、また障害者が逸脱と見なされないためにどのような努力を重ねているのかという、障害者個人と社会環境との相互作用についての研究であると言える (杉野, 2007)。

そして 1970 年代になると、アメリカのアーヴィング・ゴフマンは、障害を社会の偏見の態度としてとらえ、障害問題を「(結果ではなく) 機会の不平等」問題、すなわち「差別」問題として扱った (杉野, 2007)。

---

<sup>3</sup> しかし産業革命以前に全く障害者差別がなかったかという点、そういうわけではない。産業革命以前には、大多数の障害者が地域社会に溶け込んでいたことは確かであるが、西洋文化の文脈の中で、特に目に見える障害や知的障害をもって生まれた人々に対する抑圧や偏見が広まっていたことを示す証拠も増えてきている。これはさまざまな形をとっており、そのルーツはギリシャやローマの古代世界にある (Barnes, 1991) (Stiker, 1999)。

#### 4. 障害者家族の議論

本章では障害者家族に関する研究について内容を分析し、カテゴリーを生成した。障害者家族の研究理論の系譜について土屋（2002）は「家族ストレス論」「社会福祉論」「社会学的研究」の3つに分けられるとした。今回はその系譜についても参考にしつつ、海外の論文を含めどのような視点の研究があるのかについてより具体的にまとめた。概要は以下の表1の通りである。

図1 分類結果とカテゴリー

カテゴリー	記述内容
どんな障害者家族が回復力（レジリエンス）を持つのか	子供の障害に対して肯定的な認識は、より大きな回復力の経験と関連している（Anugraha, 2017）。きょうだい児が障害児へよりスムーズに適応できる要因には、きょうだい児のストレスや対処の経験よりも、親や家族が関わっている（Giallo and Gavidia-Payne, 2006）。
母親が持つ障害児への葛藤と受容	目に見えない障害をもつ子を世話する経験は自分を混乱させたが、結果的に北米の家族の理想と規範的な「家族のあり方」から離れたアイデンティティを獲得することができた（Cara, 2018）。子供に診断が下りたことで子供の問題行動の意味を再解釈し、正常な子供に育てられない駄目な親という立場から解放された（David Farrugia, 2009）。できない息子だと思ふ自身のスティグマから、ありのままの息子というように、親の心持ちが変わっていく（石川, 1995）（徳田, 2003）。親は社会の価値観と子の存在のとの間に挟まれて立ち往生したり揺れ動いたりする（要田, 1999）。
障害者のケアをする家族	ケア役割は母親に半強制的に義務づけられたとされる（Finch and Groves, 1983）（McLaughlin, 2019）。ケアラー以外の役割として労働や就労を求める母親は多々いるものの、女性が就労していない前提の社会的資源が多く、働くことができない（西村, 2009）。母親が働けないことによる貧困リスクがある（田中, 2020）。施設の処遇に不満を持ち、母親はどんなことがあっても自分が息子の面倒を見るしかないと思っている（寺本ほか, 2008）。
家族のケアを社会がどのように代替していくか	社会関係を多様を持つことが叫ばれているものの、母親役割の代替が難しく、生活の場を分けても親が全く関与しないということはない（田中, 2020）。障害者家族の親以外の社会的立場を獲得しうるレスパイトサービスは、親にも子にも創造的な支援効果をもたらす（中根, 2006）。施設のように障害者を閉じ込めることなく、地域が障害者の特性に慣れ、見守ることが重要（寺本ほか, 2008）。

新しい家族のあり方	近代家族を脱し、家族は介助者という役割から降り、障害者と関係性を再構築することが求められる（土屋, 2002）。 当事者と家族は自立した関係でも隔絶された関係でもなく、親と子であるという個別の関係が相互依存的に構築される（中根, 2006）。
-----------	--

#### 4-1. どんな障害者家族が回復力（レジリエンス）を持つのか

これは親の障害に対する受容や認識が、家族の回復力（レジリエンス）にどのような影響を与えるのかということについて述べられている研究群である。これらの研究では、障害児に関連する困難さに最も対処できる家族の対処戦略や特徴を明らかにすることに焦点を当てている。

アヌグラハ（Anugraha, 2017）は、子供の障害に対して肯定的な認識は、より大きな回復力の経験と関連しているとした。一方で否定的な評価はリスク要素として機能する可能性があり、子どもの身体的ケアの要求に対処するための具体的なスキルを親に教え、家族、特に知的障害のある子どもの配偶者や兄弟姉妹をセッションに参加させることは、親が否定的な評価を克服するのに役立つとした。またジャッロとガビディアペイン（Giallo, R. and S. Gavidia-Payne, 2006）は、きょうだい児が障害児へよりスムーズに適応できる要因について、きょうだい児のストレスや対処の経験よりも、親や家族の要因（社会経済的地位、過去に兄弟姉妹支援グループに参加したこと、親のストレス、家族の時間と日課、家族の問題解決とコミュニケーションなど）が関わっているとした。

この研究群の批判としては、障害者を重荷だと考えることは完璧だった家族に降りかかる外的な病理という認識に捕らわれたままであるという批判（McLaughlin, 2019）がある。その一方で、これらの研究は障害者家族を病理家族と見る個人モデルの見地から、障害者家族と環境との相互作用を把握し社会環境の変革によって家族を支えるという、社会モデルへの橋渡しの役割を果たした研究群である（中根, 2006）という見方もできる。

#### 4-2. 母親が持つ障害児への葛藤と受容

障害者家族の研究では、家族目線で障害者のケアについて振り返って書かれているものが多い。この研究群では、子供が障害者であるという現実を受け入れられない障害者の母親が、どのように障害を受容していったのかというナラティブが述べられている。

カラ（Cara, 2018）は、自閉症と診断された親へ半構造化インタビューを行った。そこでは、曖昧で目に見えない障害を持つ子供の世話をするという現在の社会的経験が、主たる養育者のアイデンティティを混乱させ、伝統的な標準的な北米の家族の理想と規範的な「家族のあり方」から離れたアイデンティティを獲得したと述べている。医療化のまなざ

しをうけた家族のナラティブについて研究したファルジア (Farrugia, 2009) は、やんちゃな子どもを持つ悪い親だと自認していた親が、医療化によって子どもの社会的に不適切で困難な行動の意味を再解釈し、医療言説の創造的で主体的な使用を通じて、甘やかされていない主体的な立場を明確にすることができるようになったとした。

石川 (1995) は、親たちの罪意識や羞恥は、障害児というスティグマをよそに屈託なく生きる子供たちと正面から向き合う体験を通して少しずつ消えていくとしている。そしてできない息子だと思う自身のスティグマから、ありのままの息子というように、親の心持ちが変わっていくとしている。それは「健常者の論理」から解放され、障害者の親が負う「不幸のループ」から解放されるということであるとされる。

また徳田 (2003) は障害児通園施設であるひまわり教室を通して、障害者の母親が子の障害を受容する過程について述べている。そこでは、わが子の障害を受容するのは難しいが、母親は自分を見つめなおし、自分を変えていく (生き直し) ことが重要であると結論づけられている。そして中根 (2006) は、知的障害者の親にインタビューを行い、障害者の親としての役割を分析した。そこでは、障害を持つ子供が生まれ驚きや不安を受け止めつつも「障害者家族の親」になっていくプロセスと、知的障害者家族の親の社会の中での役割を発見し自覚する中で子と距離を取っていくプロセスがあることがわかった。また栗田 (1999) も、親は社会の価値観と子の存在との間に挟まれて立ち往生したり揺れ動いたりする存在であると指摘した。

### 4-3. 障害者のケアをする家族

この研究群では、障害者をケアすることについて主に母親の視点から述べられている。そこでは、母親が主体的にケア役割に従事することを選んだのではなく、社会によって半強制的に義務づけられた役割であると述べられている (Finch and Groves, 1983)

(McLaughlin, 2019)。田中 (2020) は、障害者家族は一貫して介護者・ケアラーとして位置づけられるなかで、障害のある本人のニーズの代弁者・アドボケイトとして政府や社会に働きかけてきたとした。しかし家族自身の生活者としての権利を保障する視点は政策的にも家族の運動の中にも含まれてこず、福祉サービスの十分な選択肢や支援がないままケア責任を負わされる状況下で、家族のみがケアを抱え (家族への排除)、家族がケアしきれない場合は施設入所させる (家族からの排除) という選択肢しかない状態が長年続いてきたとした。

そしてケアラー以外の役割として労働や就労を求める母親は多々いるものの、女性が就労していない前提の社会的資源によって、働きたくても働くことが難しい状況であったと言われている (田中, 2020)。これについては障害者の母親の語りを分析した西村 (2009) も、障害者の親に毎朝児童の送り迎えを強要するなど、障害児の親の大変さを熟知し応援してくれるはずのヘルパーや養護学校の教員でさえ親の味方ではなかったとしている。そ

して母親が働けないことによって、障害者の家族には貧困リスクがあるとも言われている（田中, 2020）。

一方、これらのケア役割の研究群について土屋（2002）は、ケアをされる側の障害者の目線が少ないと述べ、批判した。またケア役割については、温かい家族によって介助されるべきという日本の家族規範が元になっているとした。そして必要以上に介助することが障害者への抑圧として働いているということも述べられている。

#### 4-4. 家族のケアを社会がどのように代替していくか

日本は障害者を家族で支援するという社会構造になっており、政府も家族の介助を後押しするような政策を進めてきたとした。そして家族によって介助ができなくなると、施設へ送らせた（要田, 1999）。しかし最近では、家族からの自立や地域が見守るコミュニティケアへ移行するということが言われるようになった。中根（2006）は、ケアが分有する社会において、コミュニティケアの浸透は施設か家族かという二項対立を薄め、間のグラデーションをより多様化させていくことができるとした。そしてレスパイトサービスにも触れ、これは単に親にホッとしてもらう以上に、親や子に新しい時間や機会を提供する多層的な援助方法であり、親にも子にも創造的な支援効果をもたらすとした。また重度知的/自閉障害者を家族から自立させる取り組みを行っている、たこの木クラブ NPO 法人の寺本ほか（2008）は、身体障害ではなく知的障害であっても、介助の質の高いヘルパーが長時間見守ることのできる制度を作っていくことが大事であると述べている。一方で社会関係を多様に持つことが叫ばれているものの、母親役割の代替が難しく、生活の場を分けても親が全く関与しないということはないと批判的に見る親もいた（田中, 2020）。

#### 4-5. 新しい家族のあり方

日本では愛情規範や家族規範によって障害者を抑圧的に家族の中へ閉じ込めようとしてきた。そしてその結果、家族心中であるなどの問題が発生してきたとした（杉野, 2007）。それらの問題意識から「青い芝の会」では「泣きながらも親不孝を詫びながらも、親の偏愛をけっ飛ばさねばならないのが我々の宿命である。（横塚, 1981：19）」という言葉と共に「脱家族」ということが言われるようになった。これは杉野（2007）によると、既存の「親」役割や、「家族」規範というものを脱構築することが目的であったと解釈される。土屋（2002）は、近代家族を脱し、家族は介助者という役割から降り、障害者と関係性を再構築することが必要だと述べ、それには家族扶養を前提とした社会福祉政策を変えていく必要があるとした。また中根（2006）は、社会にケアが分有されることによって、当事者と家族は自立した関係でも隔絶された関係でもなく、親と子であるという個別の関係が相互依存的に構築されるとした。



## 5. 結論

障害学研究を構築主義の観点からレビューを行った結果、オリバーや隔離に反対する身体障害者連盟（UPIAS）の声明によって、社会が障害者を作っているという「社会モデル」が普及したことが判明した。そして資本主義の台頭によって「規律性」が重視され、労働力から排除される形で障害者が作られてきたとする研究があることも見て取れた。またアメリカの医療社会学では、社会からの偏見や正常性からの逸脱によって障害が構築されてきたとする研究は多く行われてきたことが確認された。

そして障害者家族の研究においては「どんな障害者家族が回復力（レジリエンス）を持つのか」「母親が持つ障害児への葛藤と受容」「障害者のケアをする家族」「家族のケアを社会がどのように代替していくか」「新しい家族のあり方」という5つのカテゴリーの研究に類型化を行った。

そのうちの「新しい家族のあり方」のカテゴリーに入る論文群は、どれも「脱家族」論を主張している。杉野（2007）は、日本の障害学は英米に比べ遅れは取っているが、脱施設を越え、脱親などの議論が行われていることは日本特有であり、先進的であると述べている。そしてこの家族がケア役割を抱えるということについては、日本が戦前からとっている「家族扶養主義」に基づくものである（杉野, 2007）とし、その家族を規範とする社会の中で、母親は罪の意識から障害者のケアを行い（岡原, 1990）、障害者は行政の家族規範に抑圧されてきた（土屋, 2002）とした。そして、その抑圧状態の脱却として社会がケアを分有することが重要視されてきた。

またこのカテゴリーの論文においては、介助される/する関係としての障害者と障害者家族から、純粋に親子として関係を再構築することを目指す研究もあると確認された。しかしこれらの「脱家族」論の提唱する構築においては、家族から脱するために家族がどのようなネットワークを築いているかという研究が欠落している。そのため今後は、障害者の親は障害者家族から脱し、どのように自己を作っているのかという視座からの研究が望まれる。

[参考文献]

- Anugraha, Merin Rajan and Romate John. 2017. "Resilience and Impact of Children's Intellectual Disability on Indian Parents." *J Intellect Disabil* 21 (4): 315-324. doi:10.1177/1744629516654588. <https://doi.org/10.1177/1744629516654588>.
- Barnes, Colin. 1991. *Disabled People in Britain and Discrimination : A Case for Anti-Discrimination Legislation* Hurst; University of Calgary Press. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA14305600>.
- Benderix, Ylva, Berit Nordström, and Bengt Sivberg. 2006. "Parents' Experience of having a Child with Autism and Learning Disabilities Living in a Group Home." *Autism* 10 (6): 629-641. doi:10.1177/1362361307070902. <https://doi.org/10.1177/1362361307070902>.
- Canary, Heather E. 2008. "Negotiating Dis/Ability in Families: Constructions and Contradictions." *Journal of Applied Communication Research* 36 (4): 437-458. doi:10.1080/00909880802101771. <https://doi.org/10.1080/00909880802101771>.
- Chiaraluce, Cara A. 2018. "Narratives on the Autism Journey: "Doing Family" and Redefining the Caregiver Self." *Journal of Family Issues* 39 (10): 2883-2905. doi:10.1177/0192513X18765048. <https://doi.org.kras.lib.keio.ac.jp/10.1177/0192513X18765048>.
- Crow, Liz. 1996. "Including all of our Lives: Renewing the Social Model of Disability." .
- Farrugia, David. 2009. "Exploring Stigma: Medical Knowledge and the Stigmatisation of Parents of Children Diagnosed with Autism Spectrum Disorder." *Sociology of Health & Illness* 31 (7): 1011-1027. doi:10.1111/j.1467-9566.2009.01174.x.
- Finch, Janet and Dulcie Groves. 1983. *A Labour of Love : Women, Work, and Caring* Routledge & K. Paul. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA31495397>.
- Finch, Janet and Jennifer Mason. 1993. *Negotiating Family Responsibilities* Tavistock/Routledge. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA1894531X>.
- Finkelstein, V. 1980. *Attitudes and Disabled People: Issues for Discussion* International Exchange of Information in Rehabilitation. <https://books.google.co.jp/books?id=SaVqAAAAMAAJ>.
- Friedman, Lawrence J. 1995. "James W. Trent, Jr. Inventing the Feeble Mind: A History of Mental Retardation in the United States. (Medicine and Society, Number 6.) Berkeley and Los Angeles: University of California Press. 1994. Pp. Xii, 356. \$30.00." *The American*

- Historical Review* 100 (4): 1284-1286. doi:10.1086/ahr/100.4.1284-  
a. <https://doi.org/10.1086/ahr/100.4.1284-a>.
- Giallo, R. and S. Gavidia-Payne. 2006. "Child, Parent and Family Factors as Predictors of Adjustment for Siblings of Children with a Disability." *Journal of Intellectual Disability Research : JIDR* 50 (Pt 12): 937-948. doi:10.1111/j.1365-2788.2006.00928.x.
- Gleeson, Brendan. 1999. *Geographies of Disability* Routledge. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA3977205X>.
- Hanks, Jane Richardson and Lucien M. Hanks. 2010. "The Physically Handicapped in Certain Non - Occidental Societies." *Journal of Social Issues* 4: 11-20. <https://api.semanticscholar.org/CorpusID:143825520>.
- Malacrida, Claudia. 2015. *A Special Hell: Institutional Life in Alberta's Eugenic Years*. doi:10.3138/9781442620490.
- Malhotra, Rahul, Choy-Lye Chei, Edward Balan Menon, Wai-Leng Chow, Stella Quah, Angelique Chan, Shweta Ajay, and David Bruce Matchar. 2018. "Trajectories of Positive Aspects of Caregiving among Family Caregivers of Stroke-Survivors: The Differential Impact of Stroke-Survivor Disability." *Topics in Stroke Rehabilitation* 25 (4): 261-268. doi:10.1080/10749357.2018.1455369.
- McLaughlin, Janice and Dan Goodley. 2008. "Seeking and Rejecting Certainty: Exposing the Sophisticated Lifeworlds of Parents of Disabled Babies." *Sociology* 42 (2): 317-335. doi:10.1177/0038038507087356. <https://doi.org/10.1177/0038038507087356>.
- Morris, Jenny. 1993. "Pride Against Prejudice: Transforming Attitudes to Disability." <https://api.semanticscholar.org/CorpusID:143092587>.
- Oliver, Michael. 1990. *The Politics of Disablement* Macmillan Education. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA10878503>.
- Oliver, Michael and Colin Barnes. 2012. *The New Politics of Disablement*. New York: Palgrave Macmillan.
- Oliver, Michael and 亜紀子 三島. 2006. *障害の政治：イギリス障害学の原点*. 東京: 明石書店.
- Rafter, N. H. 1997. *Creating Born Criminals* University of Illinois Press. <https://books.google.co.jp/books?id=0B84gU1HTw0C>.

- Rao, Shridevi. 2006. "Parameters of Normality and Cultural Constructions of 'mental Retardation': Perspectives of Bengali Families." *Disability & Society* 21 (2): 159-178. doi:10.1080/09687590500498127. <https://doi.org/10.1080/09687590500498127>.
- Stiker, H. J. 1999. *A History of Disability* University of Michigan Press. <https://books.google.co.jp/books?id=DxLlLsBanUYC>.
- Thomas, Carol. 2007. *Sociologies of Disability and Illness : Contested Ideas in Disability Studies and Medical Sociology*. New York, New York: Palgrave Macmillan.
- Tssebros, Jan, Anders Gustavsson, Guri Dyrendahl, and 理明二文字. 1999. *北欧の知的障害者：思想・政策と日常生活*. 東京: 青木書店.
- 中根, 成寿. 2006. *知的障害者家族の臨床社会学：社会と家族でケアを分有するために*. 東京: 明石書店.
- 井上, 真理子(1947-) and 英昭大村. 1995. *ファミリーリズムの再発見*. 京都: 世界思想社.
- 加藤, 旭人. 2021. "障害者と健常者の関係形成に関する社会学的考察：東京都多摩地域における障害をめぐる教育、福祉、地域社会の再編成." 一橋大学. doi:10.15057/71550. <https://ci.nii.ac.jp/naid/500001522665>.
- 土屋, 葉. 2002. *障害者家族を生きる*. 東京: 勁草書房.
- 大曾根, 寛 and 温小澤. 2005. *障害者福祉論*. 東京: 放送大学教育振興会.
- 奈倉, 京子. 2023. *中国の知的障害者とその家族：「新しい社会性」のエスノグラフィー* 東方書店. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1130295646841887025>.
- 安積, 純子. 2012. *生の技法：家と施設を出て暮らす障害者の社会学*. 3rd ed. 東京: 生活書院.
- 寺本, 晃久. 2008. *良い支援?: 知的障害/自閉の人たちの自立生活と支援*. 東京: 生活書院.
- 小熊, 英二. 2012. *社会を変えるには講談社*. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1130000798353507712>.
- 徳田, 茂 and 智佳子伊藤. 2003. *障害をもつ人の家族の心理*. 東京: 一橋出版.
- 杉本, 貴代栄. 2012. *フェミニズムと社会福祉政策*. 京都: ミネルヴァ書房.
- 杉野, 昭博. 2007. *障害学：理論形成と射程*. 東京: 東京大学出版会.
- 植戸, 貴子. 2011. "知的障害者の地域生活のための支援と仕組みづくり 障害者相談支援専門員等を対象とした聞き取り調査から." *神戸女子大学健康福祉学部紀要* 3: 1-13. doi:10.24484/sitereports.123484-75617. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390855809755035904>.

- 榊原, 賢二郎. 2019. *障害社会学という視座: 社会モデルから社会学的反省へ*. 東京: 新曜社.
- 横塚, 晃一. 1981. *母よ! 殺すな*. 増補版 ed. Vol. 1 すずさわ書店. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN0415603X>.
- 津田, 英二. 2023. *生涯学習のインクルージョン: 知的障害者がもたらす豊かな学び*. 東京: 明石書店.
- 田中智子. 2020. *知的障害者家族の貧困: 家族に依存するケア*. 京都: 法律文化社.
- 立岩, 真也 and 晃久 寺本. 1998. "知的障害者の当事者活動の成立と展開." *紀要* 23: 91-106. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1050282813894309120>.
- 竹前, 栄治. 2002. *障害者政策の国際比較*. 東京: 明石書店.
- 船本, 淑恵. 2021. *知的障害者コロニー政策の成立と展開過程にみる障害者福祉*. 京都: 法律文化社.
- 荻野, 亮吾. 2014. "「社会関係資本」論の社会教育研究への応用可能性." *東京大学大学院教育学研究科紀要* 53: 95-112.  
doi:10.15083/00031042. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390853649532915328>.
- 藤野, 真凜 and Fujino Marin. 2022. "日本における知的障害者家族に関する研究: 本人との続柄別にみた共通要素と固有の要素." *評論・社会科学 = Hyoron Shakaikagaku (Social Science Review)* 141: 71-95.  
doi:10.14988/00028946. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390573870499651200>.
- 西村, 愛. 2009. "親役割を降りる支援の必要性を考える - 「親亡き後」問題から一步踏み出すために -." *青森県立保健大学雑誌 = Journal of Aomori University of Health and Welfare* 10 (2): 155-164. doi:10.24552/00002025. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390290699610172032>.
- . 2022. "都外施設をめぐる議論と知的障害者の親亡きあと問題の関連についての検討." *社会福祉学* 63 (2): 28-40.  
doi:10.24469/jssw.63.2\_28. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390293732926319232>.
- 要田, 洋江. 1999. *障害者差別の社会学: ジェンダー・家族・国家*. 東京: 岩波書店.
- 鈴木, 勉 and 章 植田. 2006. *現代障害者福祉論*. 京都: 高学出版.